

幌延めぐる40年の歴史を教訓に 寿都・神恵内の「概要調査」阻む

■道北の住民団体が「核のゴミを考える全国交流会」を開催

8月20、21日の2日間、「ほろのべ核のゴミを考える全国交流会」が豊富町内で開かれた。道内外から50人余りが参加し、「寿都・神恵内を『概要調査』に行かせないために」をテーマに議論を深めた。

「核廃棄物施設の誘致に反対する道北連絡協議会」などでつくる実行委が2010年から毎年夏に開いてきたが、コロナ禍で中断し3年ぶりの再開となった。まず、同協議会の共



道内外から50人余りが参加し、3年ぶりに開かれた全国交流会(豊富町内で)

同代表・東道^{あずま}さんが40年におよぶ「幌延問題」の歴史を紹介し、こう問題提起した。

「NUMOが『幌延国際共同プロジェクト』に参入することで、『処分事業を幌延に入れない!』という根本がなし崩し的に変えられようとしている。しかし、政府が(最終処分地の選定に向けた)概要調査の前に自治体の首長から意見を聞く時、知事が『ダメだ!』と言えば前に進められません。寿都・神恵内の人たちや皆さんとともに、概要調査に行かせない運動をしていきたい」

寿都町で「文献調査」に反対してきた住民団体メンバーの樋谷和幸さんは、核ゴミ問題では初めて道北の地を訪問。今年3月の函館地裁判決によって開示された町の公文書で、19年には「エネルギー勉強会が4回開催され、同調査の応募に向け準備が進んでいた経緯を伝えた。

「何の疑問も持たず議員が勉強会に参加し、住民に情報提供しなかったのは大きな問題。『役場や議員に任せおけばいい』という町の雰囲気、そうさせた原因だと思う。21年1月から町議会のリコール署名を始めたが、若い人たちの雇用先は役場や福祉施設が多く、ハードルは高い。でも、我々は諦めてはいません」

などと町内の厳しい現状を説明。さらに、幌延での処分研究と寿都・神恵内での調査は問題点が共通していると指摘し、こう呼びかけた。

「おかしいと思うことに声を上げないと、なし崩し的に進められてしまう。一介の住民にやれることに限界はあるけれど、信念があれば運動は死ぬまで続けられる。自分の住むところで、『核ゴミは一部のまちの問題ではないよね』『公の場で議論することが大事』と言える運動も皆さんの活動の1ページに加えてほしい」

主催者の山路弦太さん(豊富町民の会代表・酪農家)は、豊富の全農家が「核のゴミ拒否!」のミニ幟を購入してくれただことに言及し、「自分たちの暮らしを守るために核のゴミに反対するんだ」と皆さんに伝えることが、あきらめない姿勢につなが

る」と強調していた。

道外からの参加者からは、「第3、第4の寿都・神恵内は全国至るところにある。放射性廃棄物の処分は避けて通れない問題、負担が公平になるよう考える視点も心に留めてほしい」(東京の研究者)

「核燃料サイクル路線の破綻を恐れ、身勝手な都合を振り回すことが続く限り、政府が住民に対する尊敬の念を持つことはない。これらは暴力行為であり、闘わなければなりません」(東京のNPOスタッフ)

こうした発言を受け、道北連絡協議会の前代表・久世薫嗣さんが、「自分たちがどういう世界を創りたいかによって、運動の質は変わります。誰かにお願いするのではなく、生きるために運動をする。主義主張でなく、生活の中から取り組みを創ることを真剣に考えてほしい」と締めくくった。参加者たちは21日、幌延深地層研究センターを訪れ、「NUMOを国際共同プロジェクトから除外する」「幌延での研究終了時期の明確化と埋め戻し工程表の提示」など3項目を申し入れ。原子力機構の職員たちとやり取りを続けた。

(ルポライター・滝川康治)